

長野県老人大学受講生の世間体と保健・福祉・ 看護サービス利用に関する研究

百瀬由美子* 麻原きよみ^{2*}

高齢者に対する保健・福祉・看護サービスは整備されつつあるが、利用に際しては抵抗を感じ必要と思われるサービスを利用しない場合がみられる。その一要因として、日本人に特有な世間体が関与しているのではないかと推測され、本研究は高齢者の世間体と保健・福祉・看護サービス利用に対する抵抗感およびサービスの利用希望との関連性を明らかにすることを目的とした。世間体の意識質問紙を作成し、老人大学受講生を対象に調査し、1,294人を分析した結果、以下の知見を得た。

- 1) 世間体は、属性では出生地が農村部、以前の職業が農業、学歴が低い者ほど強い傾向が認められた。
- 2) 世間体を意識している者ほどサービス利用に対する抵抗感が大きい傾向が認められた。
- 3) 世間体とサービスの利用希望との間には関連が認められ、サービスの利用を希望しないの方が世間体の意識得点が有意に高かったサービスは、住宅整備事業、短期・中期保護であった。

また、入浴サービス、デイサービス、通所型機能訓練教室などについても世間体の各質問項目とサービスの利用希望とに関連がみられた。

以上のことから、高齢者の世間体とサービスの利用に対する抵抗感および各サービスの利用希望との間に関連性が認められ、保健・福祉・看護サービスを推進する際には、個人の社会的背景および世間体、当該地域の特性を考慮することの重要性が示唆された。

Key words : 世間体, 保健・福祉・看護サービス, サービス利用, スティグマ, 意識調査

I 緒 言

急速な高齢化社会の到来に伴い、高齢者の保健・福祉・看護サービスに対するニーズは増大、多様化している。それらのニーズに対応するために老人訪問看護ステーションの設置および高齢者保健福祉推進10カ年戦略（ゴールドプラン）等高齢者の在宅サービスは整備されつつある。

しかし、サービスの利用対象者である要介護老人や介護をしている家族の中には、「福祉サービスを受けるのは恥ずかしい」、「肩身が狭い」、「世間体が悪い」といった公的サービスを受けることに対する偏見があるためにサービスを利用しない場合がしばしばみられる¹⁻³⁾。

特に、「恥の文化」を持つ日本社会⁴⁾においては、社会的援助を受けることを親類や近隣者などから非難されたり、白い眼で見られることを恥じ

るなど、個人の世間体がサービス利用に関与していると考えられる。

世間体とは、世間の眼から見られた時の自分の状態についての意識であり、自分の行動や態度を自分自身の価値観ではなく、世間の規範に準拠して決定するという日本人特有の規範意識とされている^{5,6)}。

住民の在宅ケアに対する関心が高まっている中で、保健・福祉・看護サービスのシステム化が図られ、それらを推進していく上で、個々のニーズに応じたサービスを抵抗なく利用でき有効に活用されるために、このような世間体と公的サービス利用との関連性を検討することは有用であると考ええる。

しかし、世間体とサービス利用との関連性を検討した実証的研究は非常に少ない。そこで、本研究では近い将来保健・福祉・看護サービス（以下、サービスと省略する）の利用対象者になるであろう高齢者を対象に、世間体と保健・福祉・看護サービス利用との関連性を明らかにすることを目的とした。

* 信州大学医療技術短期大学部

^{2*} 東京大学大学院医学系研究科博士課程

連絡先：〒390 長野県松本市旭 3-1-1

信州大学医療技術短期大学部 百瀬由美子

II 研究方法

1. 対象

対象は、長野県内10カ所の地方事務所で開催している県老年大学受講生2,570人である。

2. 方法

1) 調査項目

(1) 属性

対象者の属性として年齢、性別、世帯類型、出生地および現住居地の状況、以前の職業、学歴をたずねた。

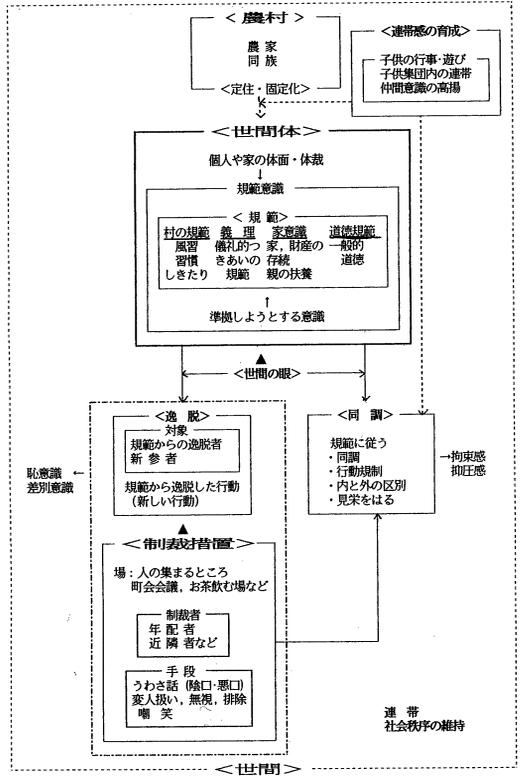
(2) 世間体の意識

本調査に先立ち、長野県M市老年大学受講生22人に対して、世間体に関する半構成的な質問による面接調査⁷⁾を実施した。面接調査により得られたデータをコード化、カテゴリー化し、継続的に比較分析し、カテゴリー間の関連性を検討し世間体を構造化したものを図1に示す。

世間体とは個人や家の体面、体裁であり、自分が世間の眼からどのように見られているかという個人の意識であり、自分の態度や行動を世間の規範に準拠しようとする個人の規範意識ととらえられていた。世間の規範には風習やしきたりなどのような村の規範、義理、家意識、道徳規範があり、多くの場合は世間の規範に同調し行動を規制したり、今までの慣習にしたがい周りに合わせ行動していた。また、一方で逸脱した行動がとられることもあり、その場合にはうわさ話や嘲笑などの制裁を受け恥意識を持つことになる。農村部では子供の頃から行事や遊びを通して仲間意識の高揚が図られ連帯感が育成されており、そのことが世間体や同調行動に関連していると推測された。以上のことから世間体を構成する概念として「農村」、「規範」、「逸脱」、「制裁措置」、「同調」、「連帯感の育成」が抽出され、それに基づいて質問項目を作成しプレテストを実施した。その結果、表現の修正が必要な項目を一部修正し「規範」5項目、「逸脱・制裁措置」7項目、「同調・連帯」8項目の合計20項目を設定し本調査に用いた。

質問紙は各項目そうではない1点～そうである5点の5段階評定で、各質問項目の得点を項目得点、項目得点の合計を世間体の意識得点とした。この意識得点は得点が高くなるほど世間体強いことを示している。

図1 世間体の構造



(3) 希望するサービスの種類とサービス利用に対する抵抗感

利用してみたいと思うサービスの内容は、訪問歯科健診、訪問栄養指導といった保健サービス、ホームヘルプサービス、デイサービス、入浴サービスといった福祉サービス、訪問看護・指導といった看護サービス等12サービスを提示し、複数選択を求めた。

サービス利用に対する抵抗感に関しては、抵抗を感じる1～抵抗を感じない5の5段階評定とした。

2) 調査方法

老年大学開講日に質問紙を配布し、郵送により回収した。

3) 分析方法

対象の属性、サービス利用に対する抵抗感、各サービス利用希望と世間体の意識および項目得点との関連性を検討した。各変数間の分析には、ピアソンの積率相関係数、F検定および対比較、t検定、 χ^2 検定を行った。

Ⅱ 結 果

1. 対象の属性

回収数は1,808 (回収率70.4%)、このうち世間体の意識質問紙の全項目に回答の得られた1,294人を有効標本数として分析した。

対象の性別は、男性582人 (45.0%)、女性706人 (54.6%)、年齢は43歳から89歳の範囲で、平均年齢68.0±4.2歳であった。

家族構成は、単独世帯117人 (9.0%)、夫婦のみ世帯510人 (39.4%)、2・3世代同居世帯572人 (44.2%)、その他74人 (5.7%)、不明・未記入21人であった。

出生地は、農村部867人 (67.0%)、住宅地278人 (21.5%)、商業地119人 (9.2%)、その他19人 (1.5%)、不明・未記入11人であり、現住居地が農村部596人 (46.1%)、住宅地577人 (44.6%)、商業地95人 (7.3%)、その他16人 (1.2%)、不明・未記入10人であった。

学歴は、文部省発行の学校系統図⁹⁾に基づいて3分類し、未就学者および高等小学校以下の者が519人 (40.1%)、新制・旧制中学校、旧制高等女学校、実業学校の者が518人 (40.0%)、旧制・新制高校、師範学校、専門学校、旧制・新制大学の者が235人 (18.2%)、その他が22人 (1.7%)で

あった。

2. 各質問項目の結果

1) 世間体の意識

(1) 世間体の意識質問紙の開発

20項目の質問項目のうち、反応分布の偏りが8割以上の項目、また項目得点と意識得点との相関係数が0.3未満の項目は削除した。さらに、因子分析の結果、どの因子にも属さない低い因子負荷量をもつ項目を除外し、世間体の意識質問紙の項目として最終的に12項目を採用した (表1)。

世間体の意識質問紙の因子分析の結果では、3因子が抽出され、第1因子同調 (表1質問項目の番号4, 6, 7, 8, 9, 11)、第2因子家意識・義理 (1, 2, 3, 5)、第3因子逸脱・恥意識 (10, 12)であった。これを質問紙作成時に考慮した構成概念と対応させると「規範」はそのまま第2因子に、「同調」も第1因子に分類された。「逸脱・制裁措置」から設定した項目で9, 11が第1因子同調に分類されたものの、質問紙作成時構成概念と因子分析の結果はほぼ同様の傾向を示していたと考えられるであろう。またCronbachの α 係数は0.72と許容範囲を示した。

(2) 世間体の意識得点および項目得点

世間体の意識得点の平均値は44.7点、標準偏差は6.4で、ヒストグラムは図2に示す通りである。

表1 世間体の意識質問紙

質 問 項 目	平均値	分 散	相関係数 項目得点-意識得点
1. お世話になったり、ものをもらったりしたときは「お返し」をするのが当然だと思いますか	4.40	0.63	0.42***
2. 長男が家の後を継ぐのが当然だと思いますか	3.45	1.42	0.49***
3. 子供は親の面倒をみるべきだと思いますか	3.93	0.99	0.47***
4. まわりの体制に合わせて行動する方ですか	3.86	1.20	0.55***
5. ものごとは今まで通りにやっていたらすべてうまくいくと思いますか	2.97	1.53	0.45***
6. 何かをするときは人の意見を聞いてからする方ですか	3.71	1.36	0.49***
7. 人の眼やうわさ話を気にする方ですか	2.93	1.66	0.62***
8. まわりの人からよく思われたいと思って行動する方ですか	2.98	1.55	0.60***
9. 自分の行動や服装に気を使う方ですか	4.00	1.04	0.44***
10. 人前で恥ずかしい思いをしたくないと思いますか	4.65	0.43	0.41***
11. 体裁を気にする方ですか	3.35	1.37	0.62***
12. 人に笑われるような行動をしないように気をつけていますか	4.50	0.56	0.45***
意 識 得 点	44.68	41.77	

*** $p < 0.001$

世間体の意識を質問項目ごとに見ると、平均値の最も高かった項目は「人前で恥ずかしい思いをしたくない」であり、次いで「人に笑われるような行動はしないように気をつけている」、「お世話になったり、ものをもらったときには『お返し』をするのが当然だと思う」、「自分の行動や服装に気を使う」の順であった。

一方、平均値の低い項目は「人の眼やうわさ話を気にする方」、「まわりの人からよく思われたいと思って行動する方」、「ものごとは今まで通りにやっていたらすべてうまくいくと思う」であった。

2) サービス利用に対する抵抗感

サービス利用に対して、抵抗を感じるとしたものが40人(3.1%)、どちらかといえば感じるが143人(11.2%)、どちらともいえないが203人(16.0%)、どちらかといえば感じないが200人(15.7%)、感じないが686人(53.9%)であった。

3) 希望するサービスの種類

希望するサービスの種類は、表2に示すように訪問看護・指導が53.7%と最も多かった。次いでデイサービス、短期・中期保護(ショートステイ・ミドルステイ)、ホームヘルプサービス、入浴サービスの順であった。

最も希望が少なかったサービスは、通所型機能訓練教室、次いで住宅整備事業であった。

3. 世間体と属性との関係

世間体の意識得点と属性との関係は表3に示す通りである。性別および世帯類型による差はみら

表2 希望するサービスの種類と人数

N=1,294(複数回答)

サービスの種類	人数 (%)
訪問看護・指導	695(53.7)
デイサービス	583(45.1)
短期・中期保護	577(44.6)
ホームヘルプサービス	576(44.5)
入浴サービス	575(44.4)
介護者休養事業	514(39.7)
日常生活用具給付事業	437(33.8)
訪問リハビリ	418(32.2)
訪問栄養指導	323(25.0)
訪問歯科健診	289(22.3)
住宅整備事業	271(20.9)
通所型機能訓練教室	232(17.9)

れず、有意な関係がみられたものは出生地、以前の職業、学歴であった。

出生地では、農村部が意識得点が最も高く、次いで住宅地、商業地の順であった($p<0.05$)。

以前の職業では、農業が、会社員よりも有意に得点が高かった($p<0.01$)。

学歴では、学歴が低いほど世間体の意識得点が高かった($p<0.01$)。なお、学歴が低い者の方に2・3世代家族、出生地が農村部、および以前の職業が農業であった者の割合が有意に高かった($p<0.05$)。

4. 世間体とサービス利用に対する抵抗感の関係

サービス利用に対する抵抗感の程度による世間

図2 世間体の意識得点のヒストグラム

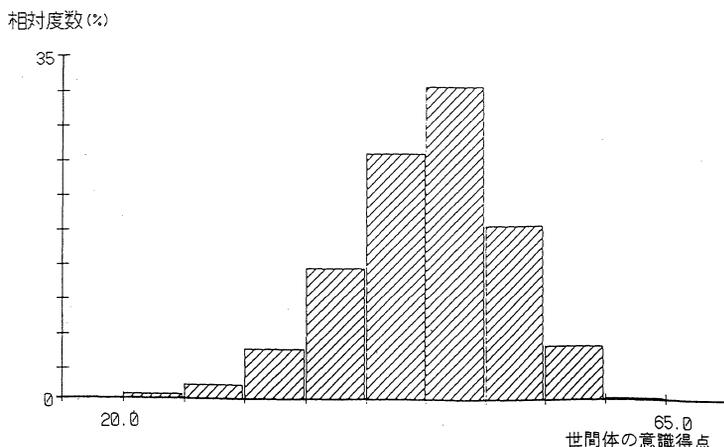


表3 属性による意識得点の比較

属性	カテゴリー	平均値±標準偏差	カテゴリー間の平均値の比較
性別	男 (N=582)	44.6±6.4	n.s.
	女 (N=706)	44.9±6.3	
家族構成	一人暮らし (N=117)	43.5±6.5	n.s.
	夫婦のみ (N=510)	45.0±6.2	
	2・3世代家族 (N=572)	44.9±6.5	
出生地	農村部 (N=867)	45.1±6.4	F=4.2*
	住宅地 (N=278)	44.2±6.3	
	商業地 (N=119)	43.7±6.0	
以前の職業	会社員 (N=745)	44.4±6.3	F=3.6**
	農業 (N=246)	46.0±6.4	
	自営業 (N=122)	44.9±6.5	
	なし (N=113)	44.6±6.0	
学歴	～高等小学校 (N=519)	45.4±6.5	F=4.7**
	～実業学校 (N=518)	44.5±6.2	
	～新制大学 (N=235)	43.9±6.4	

* p<0.05, ** p<0.01, n.s.; not significant

体意識得点の比較では、「抵抗を感じる」、「どちらかといえば感じる」を合わせたものの方が、「抵抗を感じない」、「どちらかといえば感じない」を合わせたものより世間体の意識得点が有意に高か

った(表4)。

5. 世間体とサービスの利用希望との関係

各サービスごとに、サービス利用希望の有無別に世間体の意識得点および項目得点を比較した(表5)。

1) 意識得点とサービス利用希望との関係

サービスを希望しない者の方が有意に意識得点の平均値が高かったサービスは、住宅整備事業と短期・中期保護であった。住宅整備事業はサービスを希望しない者の意識得点の平均値が、44.9±6.4、希望する者が44.0±6.2であり、短期・中期保護についてはサービスを希望しない者が45.1±6.4、希望する者が44.3±6.4であった。

2) 項目得点とサービス利用希望との関係

サービスを希望しない者の方が希望する者よりも有意に項目得点が高かったサービスは、入浴サービス、デイサービス、短期・中期保護、日常生活用具給付事業、訪問歯科健診、住宅整備事業、通所型機能訓練教室であった。

これら項目得点が高かった質問項目の内容をサービスごとにみてもみると、入浴サービスでは「長男が家を継ぐのが当然」(p<0.05)、デイサービスでは「お返しをするのが当然」(p<0.05)の各1項目であった。

短期・中期保護では「長男が家を継ぐのが当然」(p<0.01)、「今まで通りにすればなにごともうまくいく」(p<0.05)、日常生活用具給付事業では「お返しをするのが当然」(p<0.05)、「長男が家を継ぐのが当然」(p<0.05)、訪問歯科健診では「お返しをするのが当然」(p<0.05)、「今まで通りにすればなにごともうまくいく」(p<0.05)、住宅整備事業では「長男が家を継ぐのが当然」(p<0.05)、「人に笑われないように気をつけている」(p<0.05)の各2項目であった。

また、通所型機能訓練教室は「長男が家を継ぐ

表4 サービスの抵抗感による世間体意識得点の比較

抵抗を感じない	N=686	44.3±6.7	44.4±6.5	t=4.1 p<0.01
どちらかといえば感じない	N=200	44.7±5.8		
どちらともいえない	N=203	44.9±5.6		
どちらかといえば感じる	N=143	46.4±6.2	46.5±6.1	
抵抗を感じる	N=40	47.1±6.0		

表5 サービス希望の有無別世間体の項目得点・意識点の比較

No		入浴サービス		住宅整備事業		訪問歯科健診		日常生活用具 給付事業		短期・ 中期保護		デイサービス		通所型機能 訓練教室	
		平均値 ±SD	t 値	平均値 ±SD	t 値	平均値 ±SD	t 値	平均値 ±SD	t 値	平均値 ±SD	t 値	平均値 ±SD	t 値	平均値 ±SD	t 値
1	有	4.4 ±0.8	n.s.	4.3 ±0.8	n.s.	4.3 ±0.9	2.4*	4.3 ±0.8	2.2*	4.4 ±0.8	n.s.	4.3 ±0.8	2.4*	4.3 ±0.8	n.s.
	無	4.4 ±0.8		4.4 ±0.8		4.4 ±0.8		4.4 ±0.8		4.4 ±0.8		4.5 ±0.8		4.4 ±0.8	
2	有	3.4 ±1.2	2.2*	3.3 ±1.2	2.1*	3.4 ±1.2	n.s.	3.4 ±1.2	2.1*	3.3 ±1.2	3.1**	3.5 ±1.1	n.s.	3.3 ±1.2	2.3*
	無	3.5 ±1.2		3.5 ±1.2		3.5 ±1.2		3.5 ±1.2		3.5 ±1.2		3.4 ±1.2		3.5 ±1.2	
5	有	2.9 ±1.2	n.s.	2.9 ±1.2	n.s.	2.8 ±1.2	2.2*	2.9 ±1.2	n.s.	2.9 ±1.2	2.5*	2.9 ±1.2	n.s.	3.0 ±1.2	n.s.
	無	3.0 ±1.3		3.0 ±1.3		3.0 ±1.3		3.0 ±1.3		3.0 ±1.3		3.0 ±1.3		3.0 ±1.3	
6	有	3.7 ±1.2	n.s.	3.7 ±1.1	n.s.	3.8 ±1.1	n.s.	3.7 ±1.1	n.s.	3.7 ±1.2	n.s.	3.7 ±1.2	n.s.	3.5 ±1.1	2.4*
	無	3.7 ±1.2		3.7 ±1.2		3.7 ±1.2		3.7 ±1.2		3.7 ±1.2		3.7 ±1.2		3.7 ±1.2	
12	有	4.5 ±0.8	n.s.	4.4 ±0.8	2.3*	4.5 ±0.7	n.s.	4.5 ±0.7	n.s.	4.5 ±0.8	n.s.	4.5 ±0.7	n.s.	4.4 ±0.8	2.1*
	無	4.5 ±0.7		4.5 ±0.7		4.5 ±0.8		4.5 ±0.7		4.5 ±0.7		4.5 ±0.8		4.5 ±0.7	
意識 得点	有	44.9 ±6.3	n.s.	44.0 ±6.2	2.0*	44.3 ±6.5	n.s.	44.3 ±6.5	n.s.	44.3 ±6.4	2.4*	44.9 ±6.2	n.s.	44.3 ±6.5	n.s.
	無	44.6 ±6.5		44.9 ±6.4		44.9 ±6.3		44.9 ±6.3		45.1 ±6.4		44.6 ±6.5		44.8 ±6.3	

* p<0.05, ** p<0.01

1) No. は表1の世間体質問項目の番号と同じである

2) 希望無の方が平均値が高い項目のみ示した

3) 上段：サービス希望有の平均値，下段：サービス希望無の平均値，右欄：t 値

のが当然」(p<0.05), 「人の意見をきいてから行動する」(p<0.05), 「人に笑われないように気をつけている」(p<0.05) の3項目で関連が認められた。

なお、訪問看護・指導、ホームヘルプサービス、訪問リハビリ、訪問栄養指導についてはどの質問項目とも関連がみられなかった。

III 考 察

本研究は、日本人に特有な意識である世間体と、保健・福祉・看護サービス利用の際の抵抗感および各サービスの利用希望との関連性を検討することを目的に行った。

その結果、世間体は属性との関連がみられ、ま

たサービス利用に対する抵抗感および各サービスの利用希望との関連性も示された。

1. 世間体と対象の属性との関連性

世間体と属性で有意な関連がみられたのは、出生地、以前の職業、学歴であった。出生地では農村部、以前の職業が農業である者に世間体の意識得点が高い傾向がみられた。農村は、戦前においては生産と生活が密接に結びついていた生活共同体であり、連帯と秩序を守るために個人の価値観よりも村集団の規範に準拠して生活していくことが必要であったという背景^{7,9-12)}が戦後も色濃く残存していると考えられる。

一方、学歴の低い者に世間体の意識得点が高かった。これは学歴の低い者に出生地が農村で、以

前の職業が農業の者が多かったという結果から、世間体と学歴との直接的関係よりも、むしろ農村に生まれ育った農業継承者には高い学歴が要求されなかったという時代背景が関係していると推測される。

これらの結果から、サービス提供に際しては対象の出生地の地域性、以前の職業および学歴など対象個々の特性を理解した上で行う必要があると考えられる。

2. 世間体とサービス利用に対する抵抗感

サービス利用に対する抵抗感は約7割が抵抗がないと回答したが、約3割がサービス利用に対して抵抗を感じるか、微妙な立場を示していた。日本の社会においては老親の介護は家族が担うべきものということが規範になっていたことや公費で補助を受ける人の待遇は一般の人より低いものでなければならないという劣等処遇の考え方が依然として根強く残っている。そのため障害があってもサービスを利用しながら住み慣れた地域や家庭で生活したいと望んでも困難な場合がある。サービスを受けることが家庭全体に社会的な不利を被るという認識から、家族だけで介護の問題を抱え込んでしまい、本来は誰もが平等に有している権利が阻害されており¹³⁾、そのことがサービスを受ける際の抵抗感に影響している人もいることが推測される。しかし、このような問題は一部の人の問題であるということで、軽視されるべきではなく、可能な限り多くの人が抵抗なくサービスを受けられるように社会全体の問題としてとらえていく必要があろう。今回の調査は、対象が老人大学受講生であることから、老人保健・福祉の問題に関心が高いこと¹⁴⁾、老人大学のカリキュラムには保健・福祉サービスに関する講義が含まれていることなどを考慮すると、老人全般を対象にした場合には、抵抗があると回答する者の割合はさらに高くなるのではないかと推測される。

沢田¹⁵⁾は、サービス利用を阻害する要因として、制度・施策・サービスを提供する側の要因と個人の持つ内的要因とに大別している。前者の要因に対しては制度の充実、窓口の明確化、情報媒体の明瞭化などによりサービス利用につながっていく可能性があるとしているが、後者に関しては複雑な要因が混在していると考えられている。本調査においても、世間体が強い者ほどサービス利

用に抵抗を感じている傾向がみられたことから、個人の世間体がサービス利用に関与している可能性が示唆された。

「ウチ」の中の問題は家族で解決しなければならないという家族主義が根強く残っており、サービスは利用するものではなく、与えられ、おすがりするものという観念が強いことから惨めさや負い目につながり、また他人に知れてうわさになることを恐れ、サービス利用に抵抗を感じているとの報告⁹⁾もある。このような感情はまさに世間体の意識そのものであると考えられるだろう。

3. 世間体の意識とサービス利用希望との関連性

サービスの利用希望は、訪問看護・指導が最も多く、次いでデイサービス、短期・中期保護、ホームヘルプサービス、入浴サービスが上位を占めていた。これらのサービスは、老人保健法および老人福祉法に基づきサービスの強化が図られているもので、一般住民にもよく知られているサービスであると推測され、利用希望が多かったと考えられる。

今回、対象者の周知状況を調査していないという限界はあるが、デイサービス、短期・中期保護、ホームヘルパーの在宅福祉3サービスについては約8割の者に知られているという報告がある³⁾。実際に本調査地域の3サービス利用状況を見ると全国各都道府県別比較において平均以上の順位に位置している¹⁶⁾。また、調査を行った老人大学のカリキュラムには保健・福祉サービスに関する講義が含まれている。さらに、知識や新たな交流を得ようと高齢者教育の場に主体的に参加し、学習活動を継続している老人大学受講生について学習ニーズが最も高いのは健康ならびに医療に関する講座であったとの報告もある¹⁷⁾。それに加え本調査で用いた保健・福祉・看護サービス調査項目については質問紙中にサービスの内容に関する簡単な説明を付記した。以上のことから、対象はサービスの概略をある程度把握していると考えられ、このような対象の特徴を考慮し、世間体と各サービスの利用希望との関連性について検討する。

各サービスごとに世間体との関連性をみると、短期・中期保護と住宅整備事業の2種類のサービスが利用を希望しない者に世間体が強い傾向がみ

られた。

短期・中期保護は、介護者の respite サービスであり、高齢者の在宅ケアの中心的サービスの一つであることから、世間体を保つためにサービスを利用しない傾向につながることは、在宅ケアの推進にとって大きな問題であるといえよう。短期・中期保護を希望しない理由としては、たとえ短期間であっても、老人を施設に入所させることに對して抵抗があるものと考えられる。

短期・中期保護を希望しない者に有意に項目得点の高かった質問項目は「長男が家の後を継ぐのが当然」、「ものごとは今まで通りにやっていたらすべてうまくいく」の2項目であり、これらは「今までは誰もが老人の世話は家族がしてきたのに、自分たちだけ老人を施設に入れて楽をしている」などという眼でみられることが恥ずかしいという意識を反映しているものと思われる。しかし、都市化や核家族化が進んだ現在では家族の介護機能は減弱化し、家族に多くを期待するのは困難であることが指摘されている⁹⁾。にもかかわらず、世間体を気にして、私的な問題として対処し、公的なサービスの利用に結びつかないことが多い。このような現実に対して、家族の中だけで問題を抱え込まず、公的な問題としてとらえられるような意識の変容を考慮する必要がある。

住宅整備事業については、本調査では利用希望の少ないサービスであり、訪問看護のように社会的に広く認められたサービスではないため、世間体が強い者にはサービス利用に抵抗があったと推測される。

次に、意識得点とは有意な関連が認められなかったものの、項目得点と有意な関連が認められたサービスは、入浴サービス、デイサービス、通所型機能訓練教室、訪問歯科健診、日常生活用具給付事業であった。

このうち、入浴サービスおよびデイサービスについては、義理・家意識に関連した項目との関係が認められ、短期・中期保護と同様、世間に対して家族の果たすべき機能を放棄し社会的な援助をうけるのは恥ずかしいことであるとの認識からサービスを希望しないことが考えられる。サービスの利用状況をみても、横山ら¹⁸⁾の調査では、両サービスともサービスを実際に利用しているのはニーズがあると思われる者の1割前後を占めるのみ

であった。

通所型機能訓練教室については、サービスを希望しない者は、3項目において有意に項目得点が高く、全サービス中最も関連項目が多かった。一般住民にまだよく知られておらず、サービスの内容が正確に理解されていないことを考慮する必要があると思われるが、本調査においても最も利用希望の少ないサービスであった。障害を持った老人を家の外に出して地域に対してオープンにするということに対する抵抗感があり、また周囲の眼が老人や家族にスティグマの感情を付与しサービス利用につながらないことが推測される。このことは、短期・中期保護、デイサービスについても同様に考えられるであろう。スティグマとは、身体的・精神的障害により生産能力が低下した者、あるいは家族だけの力では介護しきれないといった社会システムの合理的規範からみて落後者と刻印されることであり^{19,20)}、西尾²¹⁾によれば、「個人の否定的な社会的関係の表現であり、日本独自の『世間体の悪さ』、『肩身の狭さ』」とされている。

実際に、サービスを利用しようとする際にさまざまなスティグマの感情が付与され、そのためにサービスを利用しない場合があるといわれ、また、申請や認定の手続きのプロセスの中にサービスを提供する側が対象者のスティグマを刺激するような対応をして、サービス利用を妨げた事態も報告されている²²⁾。

一方、訪問看護・指導は、サービスの利用希望では最も多く、世間体との関連もみられなかった。このことは、近年の地域住民の在宅ケアに対する関心の高まりから社会的に認められたサービスであること、健康上の困難や問題は不可抗力によるものという認識が強いこと、在宅保健・福祉について学習している老人大学受講生が世間体を気にするよりも、専門職による質の高いサービスを期待する傾向が世間体とは関係なくサービス利用希望につながっていると考えられる。

また、ホームヘルプサービスについても周知度が高く²⁾、本調査地域における利用状況の全国各都道府県別順位¹⁶⁾は19位と平均以上の利用状況であり、訪問看護・指導と同様に世間体と関係なく利用希望が多かった。サービスの周知度はその利用と強い関連があるとの報告があり²³⁾、ゴールド

プランの策定により、新聞やマスメディアを通して、ホームヘルパーの存在や、ホームヘルプサービスの内容が住民の中に理解されてきたことが比較的抵抗を感じることなくサービスの利用希望につながっていると推測される。

しかし、冷水²⁾の調査によれば、ホームヘルプサービスについて専門職の立場から客観的にみると、ニーズがあるにもかかわらずサービスを希望しないものが約半数を占め、その中でも実際に利用しているものはわずか1割にすぎないという。そして、その要因として家庭内に他人が入り込むことに抵抗があることをあげている。したがって、現実の問題となると他人の侵入を拒む気持ちが働く可能性は十分考えられる。

今回の調査対象は、現時点ではニーズがない状況で、ニーズが発生した場合を想定して回答を求めたもので、実際にサービスを利用する当事者になった場合は必ずしも今回の結果に一致するとは限らない。また、社会的に望まれる方向に回答している傾向があることも考慮しなければならないだろう。

4. 実践への適用

世間体が生地、以前の職業、学歴などの属性に関連していたことから、サービスの推進には個々の対象の社会的背景を十分理解した上で行うこと、また世間体は世間の規範に準拠するものであることから地域性を考慮することが重要であろう。

また、世間体の意識がサービスを利用しようとする際の抵抗感およびサービスの利用希望に関連していたという結果は、地域保健活動に関わる専門職が、サービスを利用する側の要因の一つとして対象の世間体を考慮することの重要性を示唆している。

実践活動においては、地域住民が保健・福祉・看護サービスに対するスティグマをもつことがないよう教育活動を実践していくことが必要であろう。とりわけ、老人を家の外に連れ出すような短期・中期保護、デイサービス、通所型機能訓練教室および新規サービスについては、住民の理解が得られるような広報活動、教育活動が必要であると考えられる。

しかし長年培われてきた価値観の変容は容易ではない。世間体とサービス利用に関する問題は家

族だけでは解決し得ない問題であり、その家族の住む地域住民の認識の変化が必要となる。

われわれの世間体に関する面接調査の結果では、世間体に対する意識の変化要因として、知識、教育、交流、体験といった個人の学習が大きな要因となっていた⁷⁾。世間体とは世間という集団の規範に準拠しようとする個人の意識であるから、サービス利用の必要性そのものが規範化するような、住民の学習活動が必要であろう。そしてこの問題を解決するための住民参加の組織をつくり、住民自らが問題を認識し、解決できるよう援助するコミュニティ・オーガニゼーションの過程をとおして地域住民の認識の変化を求めるとともに、住民自らが問題解決できる能力の形成といった地域づくりまで視野にいたれた活動が必要であると考えられる。その一方で、保健福祉の専門家は住民と関わる場において、個人や家族の意志の表出を促すような積極的な働きかけも必要であろう。またサービス利用については個人の価値観を考慮し、サービス利用を押しつけるのではなく、その選択肢を提示して説明していく配慮も大切である。サービス利用が増えることによって住民の認識の変化につながる可能性もあるだろう。さらに、サービス利用を進める一方で、サービス利用希望者が受け入れ、満足できるようなサービスの質の向上に努めることが不可欠であろう。

5. 本研究の限界

本研究は対象が老人大学受講生という限定された集団であること、年齢および地域性にも偏りがあることに限界がある。また、世間体の意識質問紙の信頼性と妥当性を高める検討が必要であり、今後は地域を拡大するとともにサービスの利用者および介護者を対象とした調査が必要であろう。

V 結 論

世間体とサービス利用に対する抵抗感およびサービスの利用希望との関連性について検討した結果、以下のことが明かとなった。

(1)世間体の意識には、生地、以前の職業、学歴が関与していた。(2)世間体を意識している者ほどサービス利用に対する抵抗感が大きい傾向がみられた。(3)世間体の意識と各サービスの利用希望とに関連がみられた。

これらのことから、地域においてサービス利用

を推進する際には、個人の背景および世間体、地域性を考慮すること、地域全体の保健福祉サービスに対するスティグマを拭い去る教育活動が必要であることが示唆された。

本研究にご協力賜りました老人大学関係者ならびに受講生の皆様に感謝致します。

なお、本研究はみすず松高科学研究助成を受けた。

(受付 '95. 6. 5)
(採用 '96. 1.19)

文 献

- 1) 沢田清方. 在宅福祉. 京都: ミネルヴァ書房, 1992; 223-224.
- 2) 冷水 豊. 障害老人をかかえる家族における福祉サービス利用希望の規定要因. 社会老年学, 1982; 16: 10-19.
- 3) 岡本多喜子. 精神症状に問題のある老人の介護者にみる社会福祉サービスの利用要因. 社会老年学, 1989; 29: 44-50.
- 4) R. Benedict. 長谷川松治訳. 定訳・菊と刀—日本文化の型—. 東京: 社会思想社, 1971; 256-260.
- 5) 井上忠司. 世間体の構造, 社会心理史への試み. 東京: NHK ブック, 1985; 94-106.
- 6) 福武 直, 日高六郎, 高橋 徹編. 社会学辞典. 東京, 有斐閣, 1971; 543.
- 7) 麻原きよみ, 百瀬由美子. 高齢者の世間体の意識構造と変化要因. 看護研究, 1995; 28: 49-59.
- 8) 文部省, 学制百年史. 東京: 帝国地方行政学会, 1972; 366-371.
- 9) 光吉利行. 農民家族, 地域社会と家族 (篠原武夫, 土田英雄共編). 東京: 培風館, 1981; 94.
- 10) 岩崎隆治. われらのウチなる“群れびと”, 現代のエスプリ. 1980; 160: 31-41.
- 11) 富田祥之亮. 概説・変貌する農村—農村の生活と社会の変化, 現代のエスプリ, 1984; 203: 5-27.
- 12) 作田啓一. 価値の社会学, 東京: 岩波書店, 1978; 311-312.
- 13) 花村春樹. 「ノーマリゼーションの父」N. E. バンクミケルセンその障害と思想. 京都: ミネルヴァ書房; 1994; 11.
- 14) 上條秀元. 高齢者の学習要求と学習行動; 生涯学習辞典. 東京: 東京書籍; 1990; 74-75.
- 15) 沢田清方. ニーズとサービスの間の「壁」をさぐる, 地域福祉活動研究, 1986; 4: 15-21.
- 16) 平成6年版老人保健福祉マップ数値表, 財団法人長寿社会開発センター編, 1995.
- 17) 西下彰俊. 高齢期の学習活動—その現状と課題—. 社会老年学, 1988; 10: 206-224.
- 18) 横山美江, 他. 要介護老人における在宅福祉サービス利用の実態および介護者の疲労状態との関連, 老年社会科学, 1994; 15: 136-149.
- 19) E. ゴッフマン. 石黒 毅訳. スティグマの社会学. 東京: せりか書房, 1970; 9-13.
- 20) 古川孝順. 社会福祉供給システムのパラダイム転換. 東京: 誠信書房, 1992; 47-48.
- 21) 西尾祐吾. 社会福祉にまつわるスティグマの感情に関する予備調査とその考察. ソーシャルワーク研究, 1989; 14: 252-262.
- 22) 寺久保光良. 「福祉」が人を殺すとき. 東京: あけび書房, 1988.
- 23) Wan, T. T. H. and Odell, B. G. Factors Affecting the Use of Social and Health Service among the Elderly, Aging and Society, Vol. 1, Part, 1981, pp. 95-115.

RELATIONSHIP OF 'SEKENTEI' TO UTILIZATION OF HEALTH, SOCIAL AND NURSING SERVICES BY THE ELDERLY

Yumiko MOMOSE*, Kiyomi ASAHARA^{2*}

Key words: Sekentei, Health social and nursing services, The use of service, Stigma, Survey

The purpose of this study was to determine if a relationship exists between 'sekentei' and utilization of health, social and nursing services. 'Sekentei' is the level of a person's self-consciousness of others observing one's behavior and endeavoring to meet the perceived norms of behavior. A questionnaire assessing 'sekentei' was developed and utilized in a survey with 1,294 persons responding to the questionnaires.

The results of this study were as follows:

- (1) 'Sekentei' was related to the place of birth, former occupation and education of persons.
- (2) Respondents who had a higher 'sekentei' score showed a tendency to have a sense of resistance concerning the use of services.
- (3) There was a significant relationship between 'sekentei' and utilization of services.

These results show the importance of considering individual consciousness of 'sekentei' and characteristics of a community to facilitate use of services and remove the stigma related to social services in a community.

* School of Allied Medical Sciences, The University of Shinshu

^{2*} Doctoral Program in Medical Sciences, The University of Tokyo